

日本データベース学会の設立 1 周年を迎えて

増永 良文

お茶の水女子大学理学部情報科学科 〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

E-mail: masunaga@is.ocha.ac.jp

あらまし 平成 13 年 3 月に「データベースとその応用に関する研究」についての貢献は極めて顕著なものと認めたとのことで情報処理学会フェローとして認証していただきました。加えて平成 14 年 9 月に「データベースシステムとその高度応用に関する研究」においてきわめて顕著な功績をあげたとして電子情報通信学会フェローの称号を贈呈されました。身に余る称号ですが、これはひとえに我が国のデータベースコミュニティの皆様のおかげと心より感謝申し上げます。さて、このたび網走にて情報処理学会データベースシステム研究会と電子情報通信学会データ工学研究専門委員会が共催して恒例の「夏のデータベースワークショップ」を開催するので、フェローからのメッセージを何か話すようにと御下命を受けました。何を話そうかと考えましたが、自分の研究を話すのもさることながら、小生が設立準備会世話人代表を務めさせていただいた日本データベース学会が去る 5 月 21 日に丸 1 年を迎えることができましたので、そのことを中心に、我が国のデータベースコミュニティの過去・現在・未来について私見を述べさせていただくことにいたします。

キーワード 日本データベース学会、設立 1 周年、データベースコミュニティ、データベースシステム研究会、データ工学研究専門委員会、ACM SIGMOD 日本支部、フェロー

On the First Anniversary of the Database Society of Japan

Yoshifumi MASUNAGA

Faculty of Science, Ochanomizu University 2-1-1 Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8610 Japan

E-mail: masunaga@is.ocha.ac.jp

Abstract It was my great honor to receive appellation “fellow” both from the Information Processing Society of Japan (IPSS) and the Institute of Electronics, Information and Communication Engineers of Japan (IEICE) in March 2001 and September 2002, respectively. I appreciate these titles and owe my happiness to the warm friends of the Japanese database community. SIGDBS of IPSS and SIGDE of IEICE, the co-sponsoring bodies of this year’s traditional “summer database workshop”, asked me to give a “fellow” talk at this workshop. I have wondered what topic should I cover either on my database activity during the last almost thirty years or else. From my social responsibility of view I decided to give my personal view on the past, current and future of the database community of Japan particularly, because I have served on the chair of the establishment committee of the Database Society of Japan just celebrated the first anniversary on May 21, 2003.

Keyword DBSJ, first anniversary, database community, SIGDBS, SIGDE, ACM SIGMOD Japan Chapter, fellow

1. はじめに

情報処理学会データベースシステム研究会登録員の皆様，電子情報通信学会データ工学研究専門委員会登録員の皆様こんにちは。筆者は電子情報通信学会の会員番号が 64 から始まりますから，1964 年(昭和 39 年)に当時の電子通信学会に入会したことになります。以来足掛け 40 年会員の末席を汚しているわけです。情報処理学会の会員番号は 74 から始まりますから，1974 年(昭和 49 年)に入会したことになります。共に長く会員でいためでしょうか，平成 13 年 3 月に「データベースとその応用に関する研究」についての貢献は極めて顕著なものと認めたとのことで情報処理学会フェローとして認証していただきました。加えて平成 14 年 9 月に「データベースシステムとその高度応用に関する研究」においてきわめて顕著な功績をあげたとして電子情報通信学会フェローの称号を贈呈されました。身に余る称号ですが，これはひとえに我が国のデータベースコミュニティの皆様のおかげと心より感謝申し上げます。フェローに認証されて何か良いことがあるのですがとよく聞かれるのですが一体どういうメリットがあるのかいまだに実感が湧かない世界です。ただ，情報処理学会からのフェローの認証は普通の賞状ですが，電子情報通信学会のフェローの認証は“盾”で行われ，それは黄金色に輝く金属プレートが重厚に埋め込まれた立派なものであり，薄い“紙”一枚の情報処理学会の認証状と比べると何だか儼かな気分させてくれます。この差は両学会のどのような違いに由来するのでしょうか，興味が湧かないわけではありませんが詮索しても余り得るものがないかもしれません。

さて，本年 5 月に電子情報通信学会情報・システムソサイエティの会長に就任された上林弥彦氏(京都大学)の後を引き継ぎ，小生が本年 5 月 24 日に日本データベース学会(The Database Society of Japan, 以下 DBSJ)の第 2 代の会長に就任いたしました。DBSJ は昨年 5 月 21 日に設立された出来立てほやほやの学会ですから情報処理学会データベースシステム研究会(以下，DBS 研)や電子情報通信学会データ工学研究専門委員会(以下，DE 研)，あるいは ACM SIGMOD 日本支部(以下，SIGMOD-J)の存在は知っているが DBSJ は知らないとおっしゃる方がいてもことさら目くじらを立てるつもりはありません。本稿ではこの貴重な紙面をお借りして僭越ながら皆様に DBSJ の紹介も兼ねつつ我が国のデータベースコミュニティの現状と将来について少しく紹介をさせていただきたく思います。

2. 日本データベース学会以前

平成 14 年 5 月 21 日，DBSJ が設立される以前には我が国には 3 つデータベースの研究グループがありました。それらが DBS 研，DE 研，SIGMOD-J です。老婆心ながら一言付け加えますと，SIGMOD は Special Interest Group on Management of Data の略で ACM(米国計算機学会)のデータベース研究会です。DBSJ の設立を述べる前に，ここでこれらの研究会の設立の経緯や，我が国のデータベースコミュニティがこれまでたどってきた道のりを簡単にまとめてみたいと思います。

図 1 に我が国のデータベースコミュニティが歩んできた道程をごく簡単に示します。

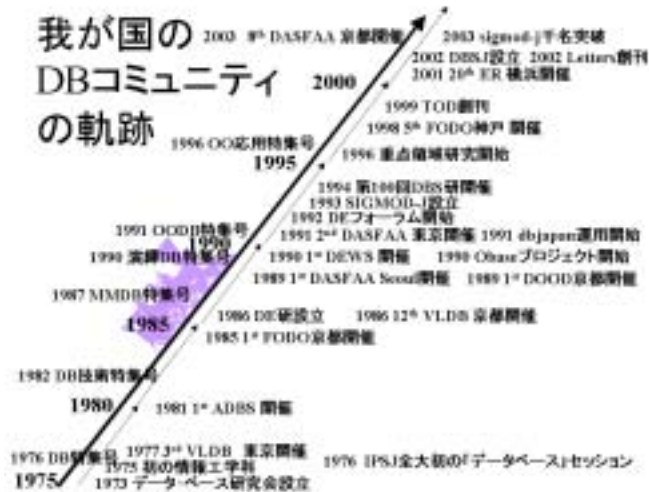


図 1：我が国の DB コミュニティの軌跡

Fig.1 History of Japanese DB Community

我が国でデータベース研究に関して初めて創られた研究会組織は「データ・ベース研究会」で 1973 年(昭和 48 年)6 月に情報処理学会のもとに発足しました。発足年度の研究会登録員数は 163 と報告されています[1]。データ・ベース研究会はその後、1977 年(昭和 52 年) にデータベース管理システム研究会、1982 年(昭和 57 年)にデータベース・システム研究会、1992 年(平成 4 年)にデータベースシステム研究会と名称を変えていきます。1994 年(平成 6 年)には第 100 回研究会を開催して記念研究会が開催されました。初代の主査は西野博二氏(当時、電総研)が務められました。歴代主査とその在任年度を示すと次のとおりです(敬称略)。初代(1973 年度-76 年度)：西野博二、第 2 代(77-80)：穂鷹良介、第 3 代(81-84)：酒井博敬、第 4 代(85-87)：上林弥彦、第 5 代(88-90)：牧之内顕文、第 6 代(91-94)：増永良文、第 7 代(95-98)：田中克己、第 8 代(99-02)：清木康、第 9 代(03-)：石川博。

DE 研は 1986 年 4 月に設立されました。現在はデータ工学研究専門委員会と呼ばれていますが、設立当初はデータエンジニアリング研究専門委員会と言われていたようです。電子情報通信学会のもとに設立されました。DBS 研と DE 研の存在は、米国で ACM SIGMOD が主催する国際会議とは別に IEEE Computer Society が International Conference on Data Engineering を 1984 年に初回、1986 年に第 2 回を開催したことから、情報処理学会と電子情報通信学会が丁度米国の ACM と IEEE の違いに対比されることによったのだと思います。DE 研は DBS 研と異なり委員長が 2 年で交代し、初代の委員長を酒井博敬氏が務められました。歴代の委員長は次に示すとおりです(敬称略)。初代(1986 年度-87 年度) 酒井博敬、第 2 代(88-89)植村俊介、第 3 代(90)真名垣昌夫、第 4 代(91-92)鈴木健司、第 5 代(93-94)牧之内顕文、第 6 代(95-96)西尾章治郎、第 7 代(97-98)喜連川優、第 8 代(99-00)北川博之、第 9 代(01-02)吉川正俊、第 10 代(03-04)横田治夫。

SIGMOD-J は 1993 年に設立されました。ACM の日本支部の設立と時を同じくしています。初代の支部長を石井義興氏(当時、ソフトウェア AG)が務められました。歴代支部長は次のとおりです(敬称略)。初代(1993 年度-1994 年度)石井義興、第 2 代(95-98)増永良文、第 3 代(99-02)喜連川優、第 4 代(03-)北川博之。SIGMOD-J は DBS 研や DE 研の研究活動と抵触することのないように、産学連携推進を心がけて運営されてきています。独自のメーリングリスト sigmod-japan を有していますが、2003 年の初めにメンバ数 1000 名を達成しています。ACM や ACM SIGXX の海外支部は多数ありますが、その中で SIGMOD-J がもっともアクティブであると ACM Headquarters は認識しています。

以上、3つの研究グループの設立とその歴史にごく簡単に触れてきましたが、我が国では過去30年間、実に多数の工夫された国内研究会や大会の開催、国際会議の開催、学会誌や論文誌を用いた特集号の刊行、論文誌の刊行、あるいは研究組織の立ち上げなどが行われて我が国のデータベース研究・開発活動の興隆に貢献してきました。それらを幾つか挙げてみます。

【主要な国際会議の開催】

- ・ 1977 第3回 VLDB 国際会議(東京)
- ・ 1985 第1回 FODO 国際会議(京都)
- ・ 1989 第1回 DASFAA 国際会議(Seoul)
- ・ 1989 第1回 DOOD 国際会議(京都)
- ・ 1991 第2回 DASFAA 国際会議(東京)
- ・ 1998 第5回 FODO 国際会議(神戸)
- ・ 2001 第20回 ER 国際会議(横浜)
- ・ 2003 第8回 DASFAA 国際会議(京都)
- ・ 2005 第21回 ICDE 国際会議(東京)

【国内シンポジウムのさきがけ】

- ・ 1981 第1回 ADBS 開催
- ・ 1990 第1回 DEWS 開催
- ・ 1991 「データベース金印よかとワークショップ」開催(本格的夏の DBWS のはしり)

【学会誌・論文誌特集】

- ・ 1976 データベース特集号 報処理処
- ・ 1982 データベース技術特集号 情報処理
- ・ 1987 マルチメディアデータベース特集号 情報処理
- ・ 1990 演繹データベース特集号 情報処理
- ・ 1991 オブジェクト指向データベース特集号 情報処理
- ・ 1996 オブジェクト指向技術とその応用 電子情報通信学会論文誌 D-I

ここで、我が国のデータベースに関する書籍(主として教科書)に目を移すと次のような軌跡をたどることができます。

【データベース教科書】

- ・ 1972 データ・ベース・システム 上條史彦 産業図書
- ・ 1978 データベース要論 穂鷹良介 共立出版
- ・ 1978 データベース入門 穂鷹良介 オーム社
- ・ 1979 データベースシステムの基礎 植村俊亮 オーム社
- ・ 1986 データベース 上林弥彦 昭晃堂
- ・ 1988 データベース 溝口徹夫 共立出版
- ・ 1990 リレーショナルデータベースの基礎 データモデル編 増永良文 オーム社
- ・ 1991 リレーショナルデータベース入門 増永良文 サイエンス社
- ・ 1993 データベースおもしろ講座 飯沢篤志・白田由香利 共立出版
- ・ 1994 新データベース論 横田一正・宮崎収兄 共立出版
- ・ 1996 オブジェクト指向データベース入門 増永良文・鈴木幸市監訳 共立出版
- ・ 1996 データベースシステム 北川博之 昭晃堂
- ・ 1996 実践 SQL 教科書 西尾章治郎監修 アスキー
- ・ 1997 データモデルとデータベース , 三浦孝夫 サイエンス社
- ・ 2000 データベース 西尾章治郎他編 オーム社

- ・ 2001 トランザクション管理 上, 下 喜連川優監訳 日経 BP
- ・ 2003 リレーショナルデータベース入門[新訂版] 増永良文 サイエンス社

3. 日本データベース学会とは

前章で示したように DBS 研, DE 研, SIGMOD-J, これら 3 つはそれぞれに歴史と伝統のあるグループです。加えて, 我が国のデータベース研究・開発に関わってきた人々はコミュニティを大事にする気風があり, 数年前に文部省科学研究費補助金重点領域研究「高度データベース」(平成 8, 9, 10 年度)をコミュニティを挙げて推進したように連帯感に満ち溢れております。このような風土の中, 3 つのグループには大体役割分担が出来上がっています。ことさら競い合っただけで同じパイを食い合っているだけではどうしようもないからです。ここ何年か定着している分担は, 7 月の夏のデータベースワークショップを DBS 研と DE 研が共催する, 12 月の DBWeb シンポジウム(かつては Advanced Database System Symposium, ADBS と略記, と言われていたもの)を DBS 研が主催する, 3 月のデータ工学ワークショップ(DEWS と略記)を DE 研が主催する, です。研究会は DBS 研と DE 研が各々適宜開催しています。SIGMOD-J は設立の経緯もあり前出の 2 つとは違い産学連携に重点を置いた活動をしています。さらに, 「情報処理学会論文誌: データベース」(以下, TOD)を我が国のデータベースコミュニティを代表する論文誌と位置付けて, その編集は DBS 研の主査である清木康氏(慶應義塾大学)が共同編集委員長の重責をこの 4 年間果たしてきました。(本年度からは DBS 研の主査の交代に伴い石川博氏(東京都立大学)が就任されました。)TOD の刊行には情報処理学会情報学基礎研究会からもう一人の共同編集委員長が出ていますが, 電子情報通信学会のご理解を得ることができて平成 15 年度からは DE 研も共同編集体制に加わり, DE 研の前委員長である吉川正俊氏(名古屋大学)も共同編集委員長となられて, 文字通り我が国のデータベースコミュニティ全体の論文誌となります。

さて, これらの活動はそれぞれがとても貴重で掛け替えのないものですが, 一つだけ問題点がありました。それは我が国のデータベースの研究・開発活動がビジビリティ(visibility)に欠けていたということです。我が国の情報処理分野におけるデータベースのアクティビティは決して小さいものではありません。例えば, DBS 研は情報処理学会に 40 近くある研究会の中できっと 5 本の指に入る活動力を誇っていると思います。TOD を過去 4 年間きちんと刊行できた実績は清木編集委員長のご尽力あつての賜物ですがやはり我が国のデータベースコミュニティに相当の体力があるからでしょう。我が国のデータベースコミュニティの活力は経済的不況や国立大学の独立行政法人化といった不透明な世の中にあつても意気盛んです。例えば本年 3 月に片山津温泉で開催された DEWS2003 / 第 1 回 DBSJ 年次大会には 272 人が参加し 145 編に余る論文が発表され大盛況でした(これには本年度から DE 研の委員長に就任された横田治夫氏(東京工業大学)がプログラム委員長として大活躍されました)。加えて喜連川優氏(東京大学)が支部長をされている SIGMOD-J は毎年多数の大会を開催しそれらに毎回多くの人々が参加しています。

しかし, 過去 30 年近く根っからのデータベース人としてこのコミュニティにどっぷり漬かっている小生にはこれら 3 つのグループが行っている様々なアクティビティを一貫して見る事ができるのですが, そうでない方々にとっては必ずしもそうではないのではないかと危惧します。つまり, 一般の人々にはデータベースの活動がどこでどのように行われているのかももう一つ分かりにくく見えにくいのではないのでしょうか。別の表現をすれば, 例えばあることで我が国のデータベースコミュニティにお願いしたいことがあったときにいったい誰にコンタクトすればよいのでしょうか。DBS 研の主査をお願いをするのでしょうか, それとも DE 研の委員長なのでしょうか, はたまた SIGMOD-J 支部長なのでしょうか? きっとどなたも誠心誠意対応されるとは思いますが, あくまで研究会や支部を代表されてはいますが我が国のデータベースコミュニティを代表し

ている立場にはありません。これは我が国のデータベースコミュニティにとって大きな損失だと思ふのです。現に、DBSJ を設立して企業の方にご挨拶を申し上げたら「えっ、今までなかったの？」と反応されたり、任意団体にしかすぎないのですが学会を名乗っているが故に社会的要請をされて学会の果たすべき責任を再認識したり、あるいは海外で開催される国際会議に DBSJ として協賛団体の一つに加わることにより我が国のデータベースコミュニティをアピールすることができたという実感がこの短い 1 年間であります。

そんなことで、コミュニティの総意として「日本データベース学会」を創ろうということになり、不肖筆者が設立準備会世話人代表を務めさせていただいて平成 14 年 5 月 21 日に設立と相成ったわけです。定款第 4 条では DBSJ の設立目的を次のようにうたっています：「本会は（社）情報処理学会データベースシステム研究会，（社）電子情報通信学会データ工学研究専門委員会，ACM SIGMOD 日本支部と連携して，データベースに関する科学・技術の振興をはかり，もって学術，文化，ならびに産業の発展に寄与することを目的とする。」

4. 日本データベース学会の活動 この 1 年

あっという間の 1 年でしたが DBSJ は幾つかの事業を展開しました。それらは一言でいえば、従来の 3 つのグループの活動を補完し我が国のデータベースコミュニティの一層の活性化に貢献したということです。ほんの小さな第一歩なのですが我が国のデータベースコミュニティの将来にとってはとても大きな一歩ではないかと考えています。それらを幾つか示せば次のとおりです：

- (a) DBSJ の論文誌である「日本データベース学会 Letters」(以下、Letters)を刊行した：平成 14 年度は初年度なので 2 号の刊行に終わりましたが、平成 15 年度は季刊で年 4 号の刊行を予定しています。大事な点は、Letters の刊行がいささかなりとも TOD の刊行と抵触してはいけないうけで、これは刊行前に関係者が十分に議論して、その刊行が我が国のデータベースコミュニティの裾野を広げ活動に厚みを増すように編集方針を定めました。簡単にいえば TOD が論文の完全性や有用性を重視するのに対して Letters は速報性や萌芽性を重視し、2 つ合わせて様々な価値を包容するように定めています。
- (b) 産学連携推進プログラムを幾つか行った：たとえばマイクロソフトと DBSJ が共催して開発ソフトウェア(MSDNAA)を無償提供したり、日立製作所と DBSJ が共催して研究のためのリレーショナルデータベース管理システム(HiRDB)を無償提供しかつ大学では決して行い得ないデータベース管理システムの現場に学生をインターンシップで受け入れたりしてきました。
- (c) 「ビジネスインテリジェンス」研究グループを設立した：データベースはシステムの側面の研究・開発も大事ですがコンテンツの高度処理も大変重要です。最近では店舗の売上データや顧客データなどをデータベースで一元管理し、それを多角的に分析して、その結果を財務管理、生産管理、品質管理、販売管理などの分野に提供することで、情報の価値を高め、より良い意思決定を行うことを可能にするビジネスインテリジェンスに関する研究に関心が高まっています。この研究グループは平成 15 年度から活動を開始しますが、これによりデータマイニング、データ分析、データ流通など、データ活用の新規側面でのアプリケーション及びデータとの出会いの場を提供できることとなります。
- (d) DBSJ 年次大会を開催して、140 件に余る発表を(株)リコーの全面協力を得てデジタルアーカイビングし平成 15 年 4 月 30 日より DBSJ のホームページで会員に公開した：Web コンテンツ化にはリコーの MPMeister を使用しました。コンテンツは RealOnePlayer を(無償で)ダウンロードして閲覧することができます。百聞は一見にしかずとはよく言ったもので、ぜひ一度ご覧になっていただきたい。(なお、閲覧には DBSJ のフルアクセス権を有する会員になることが必要。)これだけ大規模な学会映像の Web 配信は世界的に見ても例がないと思われ、平

成 15 年 4 月 28 日の日本経済新聞の朝刊に大きく取り上げられて報道され反響を呼びました。
(e) 「日本データベース学会功労賞」, 「日本データベース学会論文賞」を制定して我が国のデータベースコミュニティに貢献してきた人々を称える制度を整備した: 平成 14 年度の功労賞はこれまで 10 年に渡りボランティアで我が国のデータベースコミュニティのメーリングリスト dbjapan を運用してきた功績に対して横田一正氏(岡山県立大学)に贈呈いたしました。またリコーに感謝状を贈呈して上記アーカイビングに対する貢献に感謝の意を表しました。

ちなみに, DBSJ 会員数は現在約 500 です。DBSJ のホームページの URL は “ <http://www.dbsj.org> ” です。Letters の pdf 版や年次大会のデジタルコンテンツが鮮やかに閲覧できます。ホームページからオンラインで入会できます。学生は年会費免除で一銭もかからずフルアクセス権を有することができます。またフルアクセス権を有する正会員の年会費は 3,000 円ですが, DBS 研や DE 研の登録員であれば年会費は免除されますので即刻のご入会をお勧めいたします。

5. 日本のデータベースコミュニティの将来像

我が国のデータベースコミュニティは今後どのように育っていくのでしょうか? 既存の価値, すなわち DBSJ が設立されるまでに存在していた我が国の 3 つのデータベース研究グループが培ってきた物の見方や捕らえ方, そして判断基準はそれぞれのグループの “ 文化 ” とも言えるものでとても大事にしないとはいけません。学問の発展に一番大事なファクタは「自由」です。自由に研究ができる, 自由に発表ができる, そして権威にいささかなりとも左右されない正当な評価が受けられる, 自由とはそのようなことだと思いますが, ややもすると権威主義に陥りやすい学会活動をこれまで最も嫌ってきたのが我が国のデータベースコミュニティだという自負があります。端的な例が, 先にあげた TOD の刊行でしょう。TOD は情報処理学会論文誌が権威化し硬直化し形骸化したことに対するアンチテーゼとして刊行されました。言うまでもありませんが論文誌はコミュニティと常に価値を共有しているべきものです。

さて, 我が国のデータベースコミュニティに 3 つの研究グループがあるということは, 少なくとも 3 つの “ 価値 ” をコミュニティが享受できるとうことで, 一般論としては大変望ましいことです。しかし, 我が国のデータベースコミュニティはそれほど大きくはありません。データベースの研究・開発の第一線で日々切磋琢磨している研究者は精々二, 三百人ではないでしょうか? その中でも学会活動に参加している人を数えると百人を切るのではないのでしょうか。したがって, 一見異なった 3 つのグループがありますが, 切ってみるとそこに見えてくる研究者の顔はいずれも同じであって, 実は価値の多様性はそこからは芽生えてこないことが分かります。かえて, 「DBS 研としては・・・」とか「DE 研としては・・・」とかいったセクト主義的発想法でモノを考えてしまう弊害すら危惧される状況もあるわけです。我が国のデータベース研究の歴史は図 1 に示したように, 1970 年代の初めに遡ることができますが, 以来 30 年弱, 実は我が国のデータベースコミュニティは一つであったわけです。これはまことに結構なことであって, 毛利元就の 3 本の矢の訓話ではありませんが, 3 つが結束していたから強固なデータベース活動を行えた原因となっていたわけです。

しかし, もともと一つのコミュニティに 3 つの異なるグループは必要ないのではないのでしょうか。今, 我が国のデータベース人は一つの傘のもとに結集してそこで多様な価値を創造する時がそこに来ていることを知るべきです。哲学の弁証法に見る “ 止揚 ” (Aufheben) ではありませんが, コミュニティの成長も正反合という段階を経て動的に発展していくと考えたいと思います。産学連携推進を大きな目標の一つとして掲げる SIGMOD-J と DBSJ に理念の違いは見出せませんから一緒に活動しても何ら違和感は生じないでしょう。DBS 研と DE 研はそれぞれそれらを育て

てくれた母体と決別すべき時に来ています。それぞれの母体に大いに感謝しつつも、独り立ちして DBSJ と融合してより主体的に我が国のデータベースコミュニティの更なる発展に貢献する時に来ています。この世に子の成長を祝福しない親はいないと思います。

ここで、我が国のデータベースコミュニティが歩むであろう道程(road map)を筆者の独断と偏見でえいやっと描いてみたのが図 2 です。最速、4 年後には我が国のデータベース活動は新しい DBSJ として一つに融合し、はっきりとしたビジビリティをもつ団体として活動しているでしょう。言うまでもなく、DBSJ の設立は新しい価値の創造と、既存の価値の破壊という二面性を有しています。新しいものを創るのは簡単なのですが、既存の価値に変革を迫ることは(小泉構造改革を見ても分かるように)大変なことです。しかし、コミュニティの更なる繁栄を願うとき、避けては通れない時点にきているのではないのでしょうか。西暦 200X 年、我が国のデータベースコミュニティが一つになる日、その日はいつなのでしょう?

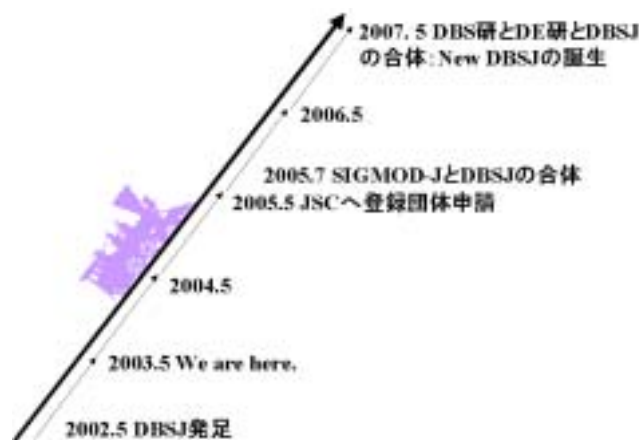


図 2 : 新しい DBSJ への道程
Fig.2 Road Map to New DBSJ

6. おわりに

我が国のデータベースコミュニティにはこれまで 3 つのグループがあったから、それぞれに主査とか委員長とか支部長を置き、それらの方々はその重責を全うされんがために多大なエネルギーを費やしその代償としてその役職を経歴欄に書くことができ、その人のキャリアアップに一役も二役もかかってきたという事実があります。そのことはとても大事で我が国のデータベースコミュニティが幾多の人材を育ててここまで大きくなってきた要因の一つであります。当然 3 つのグループが DBSJ のもとに一元化されたときそれらの役職はなくなります。しかし、これらに代わって、自分たちが自分たちの手で我が国のデータベースに関する科学・技術の振興をはかり、もって学術、文化、ならびに産業の発展に寄与するという重責の直接の担い手として、高き誇りを持って DBSJ の役員、DBSJ のもとに設立される研究会の主査という肩書きを経歴欄に記入することができるのです。

以上、我が国のデータベースコミュニティの現状と将来について“私見”を述べさせていただきました。本稿は決して DBSJ の見解を記したものではないことを末筆ながら念押しさせていただきます。

文 献

- [1] 情報処理学会第 60 回全国大会記念セッション報告集, p.107, Sept. 2000.
- [2] 情報処理, 大特集: データベース技術, Vol.23, No.10, 1982.